途中でやめるのは自分に負けること

“稲本”は、新潟県村上で桐箪笥の製造販売や桐材の卸しを行っていた稲垣家の屋号である。稲垣の祖父・吉次郎さんは稲本屋5代目だったが、戦前の不況で店を閉めた。その後、一家で上京し、稲垣の父、藤作さんは義兄と共同で鉄工所・有限会社稲本製作所を起こした。

太平洋戦争末期の昭和20年、日立兵器の下請けで機関銃の部品製造を行っていた稲本製作所は、軍の命令により茨城県岩間町に疎開。そのまま藤作さん夫婦だけは当地に留まり、戦後、民需に切り替わった日立工機から電熱器の部品などを受注し、細々と稲本製作所を継続させていた。稲垣が生まれた昭和21年はそんな頃だった。

「古い田舎町は、異質なものをなかなか受け入れません」近所のガキ大将連中からいつまでも疎開っ子扱いされていた稲垣だったが、中学1年の時に同級生から一緒に合気道の道場に通わないかと誘われる。

岩間で生まれた自分は地元民のつもりだが、さらに地元に溶け込むきっかけのつもりで入門を決めた。

当時の道場は、周りに人家のない、鬱蒼としたクヌギ林の中にあった。稲垣は、初めて対面した大先生と呼ばれる長いひげ、禿頭の盛平翁の眼光の鋭さにたじろいだ。小柄だが、鍛えられた全身から強い気が発せられている。村人らは、翁を、「忍者のように天井の梁を上り伝うらしい」と噂していたが、それくらい軽々とやってのけそうに見えた。稲垣が噂の真偽を確かめようと訊いてみたところ、「それはワシではないんじゃ」と優しく応じてくれた。

稽古は毎日夜の7時〜8時。子どもは稲垣と同級生だけで、あとはみな大人ばかりである。土地柄、自営農者が多く、誰もが屈強な肉体をしており、稲垣は嫌というほど畳に叩きつけられた。夏場になると、その畳が取り払われる。畳は貴重品で、夏は蒸れて傷むからと、隅に片付けられてしまうのだ。板の間で投げられると、あちこち擦り剥く。ひざが化膿し、正座してまた傷がパックリと開いてひどく痛かった。

それでも、「やめるのは自分に負けること」という思いがあったのと、たまに若い先輩と道場に泊まったりする体験が少年には目新しく、修行を続けることができた。

それに、初心者を相手にした時など、技が決まれば大の大人を投げ飛ばすことができた。これは痛快だった。稽古が終わると、道場に稽古着をぶら下げて帰るのだが、ある時、稲垣に投げられた入門したての男性が稽古着を持って帰って、それきり道場に顔を出さなくなった。

中三の時、大先生に初段を認められ、黒帯と袴を着けることを許された。免状には『七百二十三号』とある。つまり、723人目の有段者ということだ。「それを10倍したとして、当時の合気道人口は、世界で7000人程度。知る人ぞ知る、というより知る人ぞ知らない、というのが合気道でした」

なにしろ大先生は、紹介状がなければ入門はおろか見学さえ許さず、演武会もいっさい行わない。「武農一如」の精神で、農業と合気道の研鑽、神への祈りに努める質素な暮らし振りだった。住居も道場と廊下続きの、四畳半の居間と寝室の二間のみである。

惑　い

高校に進学した稲垣は、2年生になるとあれほど熱中していた合気道から離れた。高校のある石岡は、岩間に比べて都会だった。そこで、稲垣は悪い遊びを覚えた。「悪いコトって言っても、あの当時の高校生だから、酒飲んだり、タバコ吸ったりってくらいだけどね」──いや、当時でも今でも十分に「悪いコト」である。

一方で稲垣は、船乗りになりたいという夢を抱いていた。戦後、横浜で通訳をしていた年上の従兄弟がいた。稲垣は小三の頃から学校が休みになると、その家にひとりで遊びに行っていた。そこによく顔を見せるアメリカ人の船乗りクリントン・B・コウエルさんを、稲垣は「クリントじっち」と呼んで慕った。クリントじっちも、舶来のテンガロンハットや2丁拳銃のガンベルトをプレゼントしてくれ、日光の金谷ホテルに連れて行ってくれたりした。クリントじっちへの憧憬が、そのまま稲垣に船乗りという職業を志望させたのだ。

「船乗りになりたいなら、商船大を受けろ」と父に言われた稲垣は受験勉強をする。しかし、今度は横浜の従兄弟から、「不況で一等航海士の免許を取っても、乗る船はないぞ」と諭され、受験を諦める。しかし、それは家業を継がせようとする藤作さんが画策したことだった。稲本製作所は、その頃には20人ほど従業員を抱えるまでになっていた。

日大商学部に進学した稲垣は、合気道部に入部。大学に入ってから合気道を始めた先輩部員より、稲垣の実力のほうが格段に上だった。しかし、寿司屋でワサビを入れた酒を飲まされたり、新宿コマ劇場前の噴水に飛び込めと命令されたりといったつまらない下級生イジメには辟易した。いつしか、稲垣は学校に通わなくなり、深夜のバーテンのアルバイトが面白くなってゆく。おかげで、留年することに。

「もう1年だけ学費を出してやる。なにしろ卒業だけはしろ。卒業は、竹の節目と一緒だ」という藤作さんの言葉に稲垣は大学に戻り、合気道部の稽古にも身を入れるようになる。

4年時には主将に就任した。全日本学生合気道連盟主催の演武会が行われた京都には、部員らと羽織袴で肩で風を切って新幹線に乗り込み、食堂車のアルコールをすべて飲み尽くしてしまった。

そんな放埓な学生時代を過ごした稲垣は、卒業後は特に目的もなく帰郷、いきなり家業を継ぐよりもと、軽い気持ちで入った水戸の自動車工具メーカーを半年もせず辞めてしまう。夏の現場仕事の合間にシャワーを浴びたり、昼休みに社員食堂でビールを飲んだりする若造を引き止める上司はいなかった。

無　心

このままではオレの人生は駄目になる。稲垣は、岩間の道場での住み込み修業を決意する。大先生が亡くなった年（昭和44年）で、齋藤守弘先生が道場を管理していた。稲垣の仕事の大半は、1万坪もある道場敷地の身の丈まで茂る草を刈ることだった。汗と泥で真っ黒になり、草かぶれと蜂との戦いだった。広大な敷地の半分ほどをきれいにすると、もう片側は再び手の施しようのない状態になっているという、それは終わりのない作業だった。そこで、稲垣はひたすら自身を見つめ直した。

2年半後、生まれ変わった稲垣は、稲本製作所に入社。営業とそれに直結する製造工程の管理を行う。新しい製造技術を積極的に導入しようとするが、改革に消極的な古い体質の職人社員への対応には苦慮した。だが、それも時間をかけ変えていった。

6年後、現在地に本社工場を移転。代表取締役に就任した稲垣は、昭和60年に、かねてより出資し、工場増築部分を作業場に提供していた有限会社関東マシンツールと合併し、稲本マシンツール工業株式会社に社名変更した。オーダーに応じて特殊工具を一品製造する技術者集団を加えたことで、さらに営業の幅を広げた。それは自動機械の設計製作へと営業品目を増やすことへと進んでゆく。

もちろん苦難の時期もあった。それも「なんとはなしに」乗り越えてきた。道場に無心の構えで立つように。

合気道の愛好者は、今や170万人にも膨れ上がっている。稲垣のもとにはインターネットを通じて世界中から内弟子希望者が訪れてくる。各国から講習会の指導の招待が引きも切らない。ブルガリアのソフィア大学からは1年間の講師として招聘があった。「行きたいね」だが、今はまだ会社を離れることはできない。「でもそのうち、社長はいなくていいよ、と若い人から言われるようにしたい」と稲垣は笑う。

「最終的な責任はオレが取るから、自分たちで好きなようにやってみろ！　常にそう言っていますから」

（取材・文＝上野 歩）

アルミ材加工の医療機器部品（中央）と電動工具部品（左右）

Company Profile

エミダス会員番号：67173

◆会 社 名　稲本マシンツール工業株式会社
◆所 在 地　〒319-0209　茨城県笠間市泉 2-28
◆TEL／FAX　TEL：0299-45-2085（代）
FAX：0299-45-6572
◆E-mail　info01@inamoto-mt.co.jp
◆事業内容
自動機械及び省力化装置設計・製作。CAD を使った設計・開発から、マシニングセンタ・NC 旋盤などを使った精密部品加工、組立て、電気配線、ソフトに至るまで一貫して行っている。

◆創　　業　昭和 14 年 4 月 8 日
◆従業員数　26 名

◆主要三品目
・省力化装置設計・製作
・産業用機械設計・製作
・機械加工

◆注文・製品に関するお問合せ
担当：長嶺　学　TEL：0299-45-2085（代）